

あとがき

小熊 誠

今回の共同研究である「昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究」は、戦前における民俗学の展開に日本における若者層がどのように関わっていたかを検討することでもあった。柳田国男の『青年と学問』は、1928（昭和3）年に日本青年館から発行され、当時は一般にも読まれた本である。主に柳田国男が当時の青年に向けて講演した内容である。その中の「青年と学問」という文書は、自分も学生時代の1976年に読んでいる。実は、その後も何回も読んではいないが、よくはわからなかった。

それは、日本人とはこういう存在であり、日本人はどのような学問をすべきかという観点が、現在の日本人と当時の日本人は異なっていたからである。とくに、歴史の研究について、柳田国男は初節の「公民教育の目的」で次のように書いている。「史学は古いことを穿鑿する技術ではけっしてない。人が自己をみいだすための学問であったのだ。がそういう風には自他ともに考える人が少なかった」[柳田 1976：15]。日本人の歴史を考え、自分を知るというこの指摘は、現在では当たり前に思えるが、日本ができて60年程の当時、日本人とは何かという考えがまだ十分に人々の考えには行きわたってなかった。さらに、「現在のこの生活苦、もしくはこうして戦いまた闘わなければならぬことになった成行を知るには、（中略）この国土この集団と自分自分との関係を、十分に会得する必要がある」[柳田 1976：15]と書いている。つまり、人々にとっての「生活苦」は、ただ生活が苦しいということではなく、なぜ苦しいのかを世界の中で日本を見ることが必要で、「一個民族としての日本人」を意識する必要があるとした。柳田が、1921年から23年にジュネーブで国際連盟委任統治委員としての経験から、日本について人々、とくに青年に世界から日本を見る学問を語る時期であった。しかし、当時の日本は、すでに変化してしまっている。

この『青年と学問』が日本青年館から発行され、1935年には柳田国男の還暦を記念して日本青年館で日本民俗学講演会が行なわれた。1920年代後半から1930年代後半にかけて、柳田国男は日本民俗学を創設しようとし、同時期に日本青年館が創設されて大日本聯合青年団も設立されている。日本青年館と大日本聯合青年団は、この時期民俗学と関わっていく。この点について、丸山泰明氏が、「総論——青年と民俗学の時代——」としてまとめた。

その後、当時の青年団運動、そして日本青年館と大日本聯合青年団について、論考が掲載されている。室井康成氏の「選挙粛正運動と青年団——司馬遼太郎の“若衆”観からの問い——」は、日本青年館の理事となった田沢義舗による青年団の動きをまとめている。田沢義舗は、日本青年館設立の1921年に理事に就任している。田沢は、青年団を「政治教育」の場として構想し、柳田国男の民俗学と協力する。近代的な青年団の活動および選挙粛正運動を日本青年館で進めるが、青年団は次第に国策に組み込まれ、1936年に田沢義舗は理事長職を辞す。その後、日本青年館では郷土資料の収集作業は下火となり、青年団活動が国策の道を歩んでいくこととなる。

小林光一郎氏は、「アチック・ミュージアムと大日本聯合青年団の関連性——アチック同人大西伍一を事例に——」において、大日本聯合青年団郷土資料陳列所について述べている。大日本聯合

青年団は、その成立 10 周年を記念して、1933 年に郷土資料陳列館を創立するために大西伍一を臨時職員として採用した。伝統的な地域における若衆組あるいは若連中から発展した青年団は、各地域に存在した伝統的な若者組を基礎として青年団に改編されていたが、その活動は郷土生活に深く根ざし、むしろ郷土研究あるいは郷土教育を基本とする活動を行なった。その活動を基に、大日本聯合青年団に収集されたのが、各地の生活用具であり、それを郷土資料陳列所で展示を行なった。この展示活動は、まさに民俗学の活動であった。大西伍一は、郷土資料陳列所の仕事に伴って、1934 年にアチック・ミュージアムの薩南十島調査に参加し、その後そこに参加することになる。大西伍一は、アチック・ミュージアムの渋沢敬三が研究を行なった漁業史における漁具を研究した。しかし、1937 年に郷土資料陳列所は空になり、日本青年館の正面には「一億一身火の玉」という標語の垂幕が掛けられ、軍部の力がここにも入り始めた。大西伍一は、資料を日本民族学研究所に運んで整理し、彼は日本青年館を離れることとなった。大西伍一が大日本聯合青年団郷土資料陳列所にいた 1933 年から 1938 年は、日本青年館と民俗学の関係が深い時期であった。さらに、大西伍一を通してアチック・ミュージアムとの関係があり、さらに渋沢敬三が関わって民俗学と民族学の関連もあった。それが、郷土史家および地方の青年まで関わっていた当時の状況は、現代とは異なっていたことを小林光一郎氏は言及した。

大日本聯合青年団は、全国の青年を通じて郷土の振興を行なっていた。その一つが、地方の青年たちが製作した副業品の展覧会であった。三番目の論考として、木村裕樹氏の「青年による副業品の研究——山形県新庄町の最上共生青年会を事例として——」が掲載されている。大日本聯合青年団が日本青年館において、1928 年から 1936 年まで都合 9 回にわたって青年創作副業品展覧会を開催している。『大日本青年団史』によると、第 1 回青年創作副業品展覧会は、二府三十一県、北海道、朝鮮、台湾とほとんど全国から各地の青年が製作した副業品が 2000 点以上展示されていた。その展示品に対して、入賞者を決め、さらに販売もしていた。木村氏は、山形県新庄町の青年団活動を例に述べている。1933 年に、新庄市から胡桃細工の「福雀」が出品された。この「福雀」は、宮内庁より御買上の栄に浴しており、さらに全国に宣伝し、年 2 万個も生産した。この新庄町の青年団活動は、郷土資料陳列所の大西伍一が訪問してから活発になり、胡桃細工「福雀」は最上共生青年会を創設した小野恵敏が宣伝、販売に努めたためであるという中央の大日本聯合青年団と地方の最上共生青年会の関連性が浮き彫りになった。

もう一つ、日本青年館が積極的に行った活動は、郷土舞踊と民謡であった。黛友明氏は、第 4 論考として「郷土舞踊と民謡の会」の理念と現実——日本青年館所蔵資料と竹内芳太郎のノートから——」を記している。1925 年の日本青年館開会式で、第 1 回の郷土舞踊と民謡の会が開催された。日本青年館大講堂で、地方に根を下ろした青年団による郷土舞踊と民謡が開催された。これは、地方青年の健全な娯楽の振興を目的とした日本青年館が、そのモダンな空間において、地方・植民地の民俗芸能を都会人が鑑賞するという性格があったことは確かであるが、そこには多くの研究者が関わっていた。審査顧問には、民俗学者の柳田国男、国文学者であり作詞家の高野辰之、舞踊研究科の小寺融吉が加わり、その他折口信夫、宮尾しげを、竹内芳太郎など多くの支援を受けた。郷土舞踊と民謡の会は、『郷土舞踊と民謡』全 10 冊や、撮影、レコード吹込など記録が多くある。竹内芳太郎は、今和次郎の弟子として民家研究を行なうが、折口、柳田、今などによって結成された民俗芸能の会を通じて郷土芸能と民謡の会に関わる。竹内芳太郎のノートに、郷土舞踊と民謡の会の記録がある。民俗芸能は、無形で形のない芸術であるが、それと造形美術の関連を竹内ノートでは考えようとしており、興味深い。

以上の論考は、本研究グループが現在の日本青年館図書・資料センターで数度調査をし、さらに

各参加者に関連のある地域の調査を行なった。それらをまとめて、「日本青年新聞」をはじめ5つの解題・解説が本報告書には収められている。これらの解題・解説は、上記の各論考の資料あるいは写真として興味深く、また重要な資料である。戦前期における日本青年館、大日本聯合青年団の研究を行なう人々の参考になる貴重な資料でもある。

「あとがき」を書いている小熊は、日本青年館が全国の地方青年団から寄付を集めた事象について、地方の青年団の考えと動きを調査した。宮城県気仙沼大島の漁業史文庫に、大正五年以降の青年団の資料が残されており、大正十年に「日本青年館建設宣言書」が、宮城県の青年団施設を通して、そのコピーが気仙沼大島まで配られている。それに対して、気仙沼大島の地域ごとの青年団は、それぞれに意見を持ち、検討をしている。これらの文書を検討して、地方青年団が日本青年館に対してどのような考えを持っていたのかを検討して、報告を書く予定であった。しかしながら、今回の報告書には載せることができなかった。申し訳なく思っている。この報告は、別途神奈川大学日本常民文化研究所編『歴史と民俗』に掲載する予定である。

本報告書でまとめた共同研究「昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究」は、この課題に関する結論ではない。むしろ、この内容に関わる研究は、これからまだ展開する可能性が大いにある。今回の研究グループ参加者およびこの課題に興味を持つ将来の人々がさらに研究を展開していくことを期待し、「あとがき」としたい。

参考文献

柳田国男 1976 (1928) 『青年と学問』 岩波書店。